

養蜂めぐり歩き <その5>

石塚養蜂園をたずねて（その2）

前号に引き続き、宮城県丸森町耕野地区の石塚養蜂園の活動について報告する。

現代の養蜂では、ラングストロス式巣箱とよばれる巣箱を用いる。巣箱の中には9枠程度の木枠をはめ込むことができ、ミツバチはその枠に合わせて巣を作り、蜜をため、卵を産む。この枠がスライド式で、出し入れ自由であるため、巣箱内部の点検（内検）が可能となり、産卵状況、幼虫の生育、貯蜜状況などを枠ごとに評価し、箱の内部を適切な状態に管理することができる。また、巣箱の状態が良く蜂数も増えている「勢いの良い群」を別の巣箱に分割して群数を増やす「割り出し」という作業も一部の枠を抜き出して新しい巣箱に入れ替えることによって容易に行える。さらに、枠をそのままセットできる遠心分離機を用いて、ハチミツを効率よく衛生的に採蜜できるほか、採蜜後も枠に巣が残るため、枠を再度巣箱内に戻すことができる。伝統的な巣箱の中はブラックボックスで産卵

や貯蜜状況を観察することができず、採蜜するときには巣を壊さなければならぬことと比べ、格段に効率的な技術である。



ラングストロス式巣箱の内検

今回の訪問時には、こうした日本の近代的養蜂技術を研修するため、ザンビア人1名がOJTを行っていた。実は、丸森町耕野地区では、ザンビアで実施されていたJICAプロジェクトのカウンターパート研修を2010年に受け入れて以来、多くのザンビア人研修員を受け入れており、2016年から2019年までは地区の農家を中心となった草の根プロジェクトをザンビアで実施していた。石塚養蜂園でもこれまで、17人の研修員を受け入れてきた。ザンビア人研修員が「内検」、「割り出

し」の作業を日本人スタッフとともに段取り良く的確に行う様子から研修員が技術だけでなく、日本的チームワークもよく習得しているように感じられた。

地区での研修員受け入れをきっかけに、石塚氏は、JICA プロジェ

クトの短期専門家としてザンビア赴任し、現地で養蜂指導をした。その経験からザンビアの養蜂の発展には、近代的な養蜂技術を持つ養蜂家の育成も必要である一方、小農の生計向上を考慮すれば、伝統的または、中間的養蜂技術の改善も必要だと考えている。そのためラングストロス式巣箱だけでなく、トップバー式と呼ばれるアフリカで普及している中間型の巣箱に改良を加え、試験養蜂をしたり、トップバー式の壊れやすい巣に適した遠心分離機の改良にも取り組んだりしていた。今後のザンビアの養蜂技術の改善のためには、こうした蜂群の管理や採蜜法の改善だけでなく、ハチの行動と蜜源植物の生態を一年通じて観察し、伝統的な慣習で決まっている採蜜時期を再検討する必要もあると考えている。

養蜂が、巣箱内の小さな環境と巣箱を取り巻く山林、草原、田畑などの、地域全体の環境にたいする理解と配慮が必要な興味深い技術体系であり、自ら開発した商品を直売するスタイルが、農業の6次産業化の具体例でもあることから、石塚養蜂園の活動は自然と社会に対して包括的に取り組む「なりわい」として興味の尽きないものであった。また、石塚氏をはじめスタッフの皆さん、そしてザンビア人研修員が生き生きと仕事に取り組んでいる様子に、養蜂の可能性を感じた。

*2019年10月の台風19号により宮城県丸森町は全域で甚大な被害を受けました。お見舞い申し上げますとともに早期の復興をお祈りします。



トップバー式巣箱の内検するザンビア人研修員。トップバー式では巣の形が自然巣に近い形になる。